ようこそ
盈進の読書科へ
VOL.6

読むことは「知る」こと
書くことは「考える」こと

盈進は「平和、ひと、環境」を大切にする中高一貫の学び舎です。豊かな言語力を身につけ、確かな倫理観を養い、きらりと光る独創性に磨きをかけることを目指す「ひとづくり3教科」を学校教育の柱に据えることで、たくましく生きる力を育む教育を展開しています。中でも「読書科」はすべての学力の基盤となる「ことばの力」を培うオリジナル教科として特に中心的な役割を担います。

EISHIN GAKUEN

SPECIAL INTERVIEW 2025

～夢は続く、仲間と共に～

島根大学 総合理工学部
総合理工学科へ進学

塚本　宗史（つかもと そうし）

2024年度高校3年生［陸上部キャプテン］
福山市立道上小学校出身（チャレンジャーコース）

島根大学 材料エネルギー学部
材料エネルギー学科へ進学

西松　憲吾（にしまつ けんご）

2024年度高校3年生［ソフトテニス部キャプテン］
福山市立加茂小学校出身（チャレンジャーコース）

2025年度の「ようこそ盈進の読書科へ」の冒頭を飾る卒業生のインタビューのテーマは「夢は続く、仲間と共に」。今春盈進高校を卒業した塚本宗史君と西松憲吾君へのインタビューです。中学時代から仲の良い2人の夢にはある共通点があり、中学3年生の修了論文でも共同研究に取り組んだ経験を持ちます。そうした中で確かなものにしてきた2人の夢。偶然にも同じ大学に進学することになった2人のこれまでとこれからを語ってもらいます。

❖島根大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

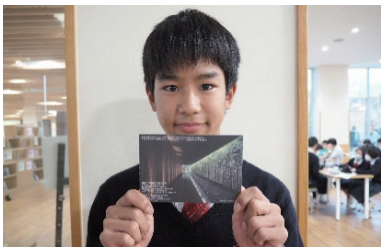
塚本：僕は木造建築に興味があります。視覚や嗅覚、触覚などの感覚に訴え、ストレス軽減やリラックス増進に効果的な木という素材に魅力を感じるからです。大学のある島根県は歴史建築やレトロ建築、近代的な文化施設も多くフィールドワークも充実しています。将来的には1級建築士を目指しているので、古民家などのリノベーションなどにも積極的に挑戦したいです。

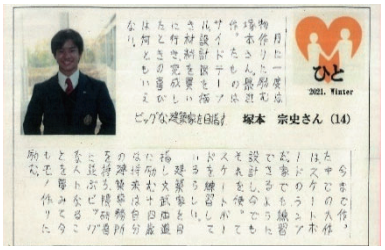
西松：僕は機能性やデザイン性に富み、なおかつ環境にも優しい素材の開発に関心があります。もともと僕も建築、とりわけスタイリッシュなコンクリート建築に魅せられていたのですが、次第に素材自体が持つ課題に着目するようになりました。島根大には新素材の創造や再利用について取り組む研究室があるので、そこで学んで将来は土木の専門技術を街づくりに生かしたいと考えています。

❖2人とも共通点は「建築」ってことだったよね。それはいつから意識し始めたの？

塚本：小学4年生の時から「建築士」が夢でした。中学1年生の時には自分の夢について描く「ドリームキャンバス」も作成しましたし、文章を「中国新聞ヤングスポット」にも載せて頂きました。

西松：最初は「ものづくり」には興味があったものの、まだ具体的には夢が決まっていませんでした。そんな中、中学2年生の読書・探究の授業で、憧れの人に手紙を書く機会があって、スペインのサグラダファミリアの彫刻で知られる外尾悦郎さんに手紙を書いて返事を頂いたのは感動的でした。





2人が読んだ本と探究の歩み
中学1年生➡中学3年生

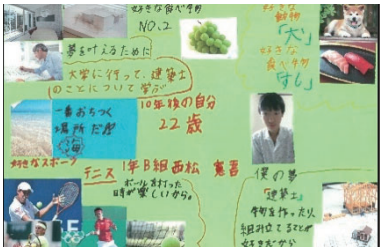
隈研吾
『建築家、走る』

安藤忠雄
『仕事をつくる』

隈研吾
『建築家になりたい君へ』

安藤忠雄
『歩きながら考えよう建築も、人生も』

1段目：【1年】ドリームキャンバス　2人の夢は「建築士」
2段目：【2年】塚本君の夢「1級建築士」、西松君は「大工」
3段目：【2年】塚本君は隈研吾さんから手紙をもらい、
　　【2年】西松君は外尾悦郎さんから手紙をもらう
4段目：【3年】2人の作成した「新聞ひと欄」



❖夢が重なる2人は、中学3年生の修了論文でも「建築」をテーマにしたんだったね。

塚本：中学2年生で隈研吾さんという建築家を知った僕は、隈さんの作る木造建築に憧れ、本も読みました。ちょうどその頃東京オリンピック目前で、彼が手掛けた国立競技場でも話題になっていましたからね。僕自身も当時岡山県の蒜山でおこなわれていた「隈研吾展」で隈建築の実物を目にしました。土地の環境や文化に溶け込む伝統的な木組み構造を用いた独特な建築は、隈さんの建築の特徴でもあります。僕の憧れの存在である隈建築を深く考察したいと思い、テーマに決めました。

西松：僕は木造建築とは対極にあるコンクリート建築の美しさに惹かれて、隈さん同様世界的な建築家とされる安藤忠雄さんの建築をテーマにしました。安藤さんって元プロボクサーであり、独学で建築を学んだという異色の経歴の持ち主なんですよ。さらに彼は近年日本各地で子ども向けの図書館建築に力を入れており、未来への贈り物という寄付の形で携わられていることでも知られています。建築もですが、彼の生き方にも憧れています。

❖修了論文の執筆はどうだった？

塚本：正直文章を書くのは大変でした。でも自分の好きなテーマでとことん調べていく作業は楽しくて、最終的に原稿用紙32枚の大作を書き上げたことは大きな自信につながりました。

西松：僕も27枚書きました。論文を書くときは塚本君と一緒に作業することも多かったです。もちろん調べる対象は違うのですが、アプローチの仕方は重なる部分も多かったので、お互いに確認し合うことができて心強かったです。一緒に安藤さんが手掛けた「尾道市立美術館」にも行きました。

塚本：それに僕たち2人以外にも「読書空間の多目的化」について調べているクラスメイトがいたので、3人でZOOMインタビューもしました。論文の中には3人で相談して書いた部分があります。

3人でZOOMのインタビューに挑戦

中学3年時の学年芸術鑑賞は直島！安藤忠雄氏が手掛けた地中美術館でした。

❖グループ研究という初めてのスタイルも評価され、「特別賞」だったね。

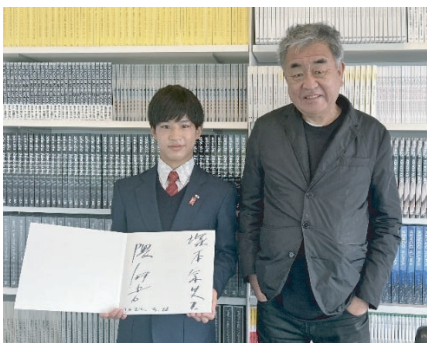
塚本：1年間かけて書き上げた修了論文を卒業式の日に表彰して頂いて嬉しかったです。仲間がいたからこそできたことが沢山ありました。達成感と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

西松：仲間の存在は心強かったですね。僕はそれに加えて、なんと隈研吾さんの東京にある建築事務所に招待して頂いたんです。僕の修了論文を隈さんにお送りしたら、僕の励みになればと面会の時間を設定してくださったんですよ。修了論文に一生懸命取り組んでよかった！と心から思いました。

❖それはすごい。実際に隈研吾さんにお会いしてどうだった？

塚本：いや、本当にオーラがすごくて。僕は緊張で固まってしまって。でも隈さんは僕の話をちゃんと聞いてくれました。そして本にサインしてプレゼントしてくださったんですよ。宝物です。
隈さんって、もう世界的な建築家で雲の上の人です。でも建築だけでなく物事に対する考え方もとっても深くて、あんなにたくさんの素敵な建築物を作られても研究を続けて、僕みたいな中学生にも会って励ましてくださって、最高の中学卒業＆高校入学祝いになりました。

2022年3月26日 隈研吾都市建設設計事務所にて



隈さんから本をプレゼントして頂きました

隈さんが手がけられた国立競技場も見学

❖中学での学びを終えて、高校に入学した2人はその後、どんな活動をしたの？

西松：僕は中学生のときに安藤忠雄さんのコンクリート建築のかっこよさに魅了されて、「コンクリート」という材料に興味が湧いていきました。するとセメントの製造過程で二酸化炭素が大量に発生するという課題があることを知ったんです。環境保護の観点は建築にも不可欠であると考えた僕は地元の建設会社の見学もしました。そこで実際にコンクリートが作られているところやセメントの強度テストをする過程を見て、学習を深めました。また二酸化炭素問題へのアプローチ等をインタビューしました。そして、これを大学での学びの中心に置きたいと考えるようになりました。

塚本：将来的に住居の建築をしてみたいと考えていた僕はまず、家が建つまでの工程を実際に目で見たいと考え、市内の工務店に行き見学しました。設計技術だけでなく、経営の視点から見た建築業というものを実感することができたと思います。職人さんとの連携をきちんと図り、顧客の要望に応えるためには信頼関係が欠かせないのだということも知ることができた貴重な体験でした。またその後、やっぱり木造にこだわりたい僕は宮大工さんの仕事も見てみたいと思うようになり、実際に訪問して学びを深化させました。災害にも強い建築の在り方について考えさせられました。

❖高校生になっても、自分の夢をさらに確かにする活動を続けたことが、「夢」への確かな道筋を作ったようだね。では、盈進での6年間を振り返って、後輩たちへのアドバイスを。

西松：僕は中学生の時、生徒会のエコ委員会で活動していました。生徒会室に残ってポスターを作るのは大変な作業でしたが、誰かに「伝える」難しさや遣り甲斐を感じるいい経験になりました。また人前で話す機会も多くあり、かなり鍛えられました。クラブ活動ではソフトテニス部のキャプテンを中高ともに任せて頂きました。チームをまとめるために僕が最も力を入れたことはコミュニケーションを図ることです。
ここで培った共感力や協調性が僕のストロングポイントになったのは間違いありません。この6年間、僕は多くの仲間に恵まれました。仲間の存在が僕の力を引き出してくれたと言ってもいいと思います。

塚本：僕はもともと自分から積極的に行動するタイプではありませんでした。でも、中学2年生の時に憧れの隈研吾さんから頂いたお手紙の中で「中学生のうちはいろいろなことに興味を持つといいよ、ガンバッテ！」というアドバイスを頂いたことが大きな励みになりました。だから部活動では新しい練習法に挑戦してみたし、修了論文もまずはなんでもやってみよう！という気持ちで取り組むようにしました。その結果、隈さんとお会いすることもできて、そこで生まれた自信が、大学入試では最大の武器になったのです。
中学生の皆さんには、今学んでいることはすべて未来につながるということをぜひ伝えたいです。

中央が塚本君

❖仲間とともに自分の未来を切り拓いた6年間だったね。これからも2人の夢を応援しています！

Special Report 2024

「読書の日」はじまる！

2024年5月2日、盈進に新しい行事が誕生しました。その名も「読書の日」。ゴールデンウィーク前日の午後、自分の好きな本を自由に読むという、なんとも素敵な時間です。思い思いの本を手に、図書館、多目的ホールで思う存分読書を楽しむ中学2年生。晴天に恵まれたので、中庭でのんびり読書をする生徒もいます。

《生徒の感想から》

盈進に「読書の日」ができました。このイベントは1年生の頃にはなく、今回僕たちが初めてで、とても良い時間だなぁと思いました。盈進に入って本に興味が出てきて何冊も本を買いました。まだ読めていない本が10冊くらいあります。今日は本をじっくり読める時間があって、とても嬉しかったです。（2024年度2年生）

今日は午後の授業が全部読書でした。「あぁ、盈進入って良かったぁ」と改めて思いました。図書館で本を借りた後、中庭で本を読みました。私は部屋の中で読書をするよりも、外で太陽の光を浴びながら読書をする方が好きでした。新しい発見でした。また外で読書をしたいです。（2024年度2年生）

読書の日は、100分読書をしました。図書館で自分の読みたい本を選んだり、読みたい場所で読書をしたりと、とても楽しかったです。校長先生が「出会った本で人生が変わるかもしれない」とおっしゃいました。自分が読みたい本や興味のある本を探すことはそういうことかもしれないと感じました。もっと読書が好きになりたいです。

（2024年度2年生）

2025年度も実施！

そして2025年4月21日、入学して2週間になる中学1年生を対象とした「読書の日」が開かれました。今回は図書館のオリエンテーションや「芸術の日」に訪れる「銭天堂へようこそ」展に向けた準備などを盛り込んだ、なんともぜいたくなプログラム。元気いっぱいの1年生を取材しました。

今年の目玉は何と言っても、担任の先生による屋外での「読み聞かせ」企画！まさか中学生になっても絵本を読んでもらえるなんて、嬉しすぎますね。生徒のみんなはワクワク、担任の先生はドキドキの最高のコラボレーションです。

さあこれから始まる盈進での6年間、先生たちから愛情をたっぷり注いでもらって、本を読んで心を耕し、仲間とともにすくすく成長していってください。「読書の日」はそんなみんなの「盈進生活のはじまり」を応援する1日でもあります。

《生徒の感想から》

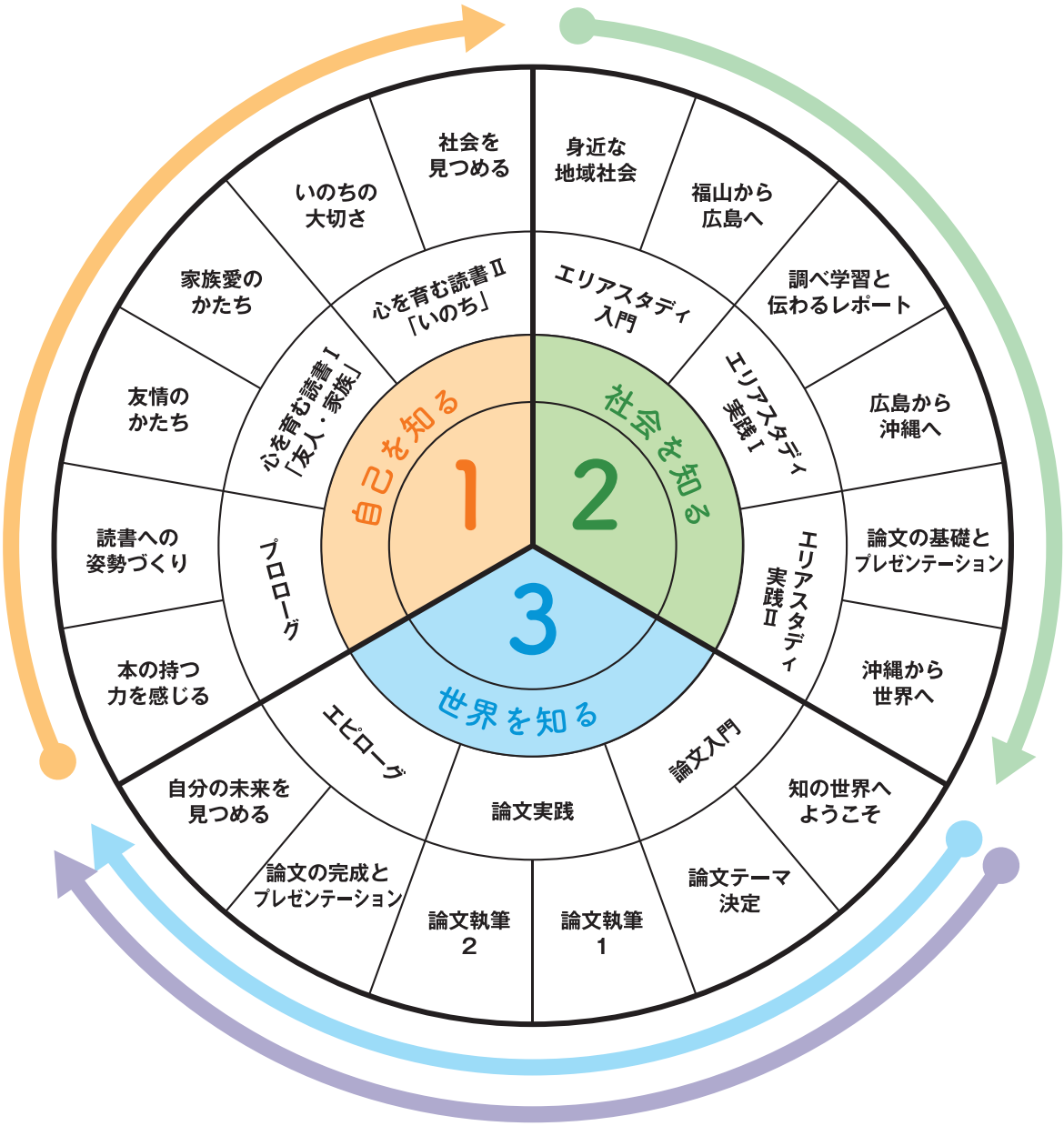
「読書の日」というものがありました。銭天堂の動画を見たり、自分だったらどんなお菓子を作るか考えたりして本を読む時間でした。こんなに長い時間学校で本を読んだことがなかったので、いい機会になったと思います。私は本が好きなのでとても楽しかったです。（2025年度1年生）

「読書の日」という時間がすごく楽しかったです。図書館に初めて行ってみてたくさんの本があり、驚きました。さすが盈進。あと、読み聞かせの「どこいったん」が面白かったです。この授業は通常の授業と違って、時間の流れが早く感じました。「読書の日」をぜひ増やしてほしいと思いました。（2025年度1年生）

入学したばかりの1年生にも大好評だった「読書の日」は、今年度2回を計画しています。本が大好きになる仕掛けがたくさん用意されたこの盈進で、みなさんが素敵な1冊と出会うきっかけを見つけてくれますように。

読書科の学び ～本と出会い、ひとを知る～

読書科の授業には各学年に「学びのテーマ」が設けられています。週1回の授業で選定図書を年間10冊以上、3年間で30冊読むことを目標にしています。3年間の読書活動の中で、前半は仲間と本を読む一体感を味わいつつ、お互いの意見を交流することで、心を豊かに育みます。また後半は、私たちが生きる社会について知り、この世界で今起きていることを見つめ、各自が考える課題を解決します。「読み、書き、伝える」活動の中から自分の生き方を見つめる教科です。



読書科３年間の学びのテーマとカリキュラム

1年生

2年生

2年生では沖縄についての調べ学習をおこなうため、この他にも沖縄に関する本を多数使用します。

3年生

3年生では各自の選んだテーマに基づいて『修了論文』に取り組むため、使用する本も1人ひとり異なります。
学校図書館、公共図書館の所蔵する本を自分で見つけることから始めます。

1年生のテーマ 自己を知る
personal

1年生のテーマは「自己を知る」。家族や友人とのつながりを通して心の成長を遂げる主人公の姿に、自分自身を重ね合わせて読みます。さまざまな愛情のかたち、友情のかたちに触れ「かけがえのない自分」に出会うとともに、自分を取り囲む人の存在にも気づくようになります。心を育みながら本が大好きになる1年間です。

2年生のテーマ 社会を知る
local

2年生は「自己」から「社会」へと視点を移し、読書活動の領域を拡げます。私たちの故郷「福山」そして「広島」について知り、「平和」というキーワードを学習旅行で訪れる「沖縄」さらに「世界」に結び付けます。「地域研究」×「平和学習」が生み出すドラマチックな読書活動を展開する学年です。

3年生のテーマ 世界を知る
national global

「自己」から「社会」へと視野を広げた2年間の学びを経て、3年生ではもっと広い「知の世界」での学びを体験します。自分の興味・関心のある分野からテーマを設定し、4000字以上の文章をまとめる修了論文は中学校3年間の読書活動の集大成となります。

未来を見つめる15歳へ　～ドリームプロジェクト～

EISHIN DREAM PROJECT

盈進の建学の精神は「実学の体得」。社会に貢献できる人が持つ本当のにんげん力を身に付けるために「読書科」が創設され、四半世紀を経ました。そこで、こうした教育理念を大切にしつつ、「読書科」が主体となって「未来を見つめる15歳」を育成するため、「ドリームプロジェクト」を立ち上げました。

「ドリームプロジェクト」では、生徒たちの読書活動をさらに充実させるため、読書行事や講演会を企画、また読書環境の整備をおこないます。生徒たちの夢の実現を後押しする、盈進の「読書科」。ワクワク・ドキドキがいっぱい詰まった学びを一緒に体験しませんか？

日常生活や行事

理科の学習

島 立樹
ソフトテニス部
福山市立新涯小出身

楽しい理科あふれている

中学生　島　立樹　13歳

世の中には楽しい理科があふれていると、小学生当時の自分に伝えたい。その頃、理科が苦手分野で何のために学ぶのか正直、理解ができていなかったからだ。

現在、生物を学習している。最初は、また興味のない授業範囲だなと思っていたが、ある先生のおかげでそれが裏返った。

先生は元々、生物学専門の学者だと聞いたことがある。その影響もあるのか、たくさんの雑学を知っておられる。

最近の授業では、米国のロケット回収について話し、先生がすらすらと解説してくださった。理系に進めば、これだけの雑学や知識を身に付けることができるのか」と思うほど、偉大でかっこ良かった。

僕は理科の面白さに気付き、毎日の授業をわくわくしながら受けている。踊ってしまうほど楽しくなる。

先生、理科の面白さに気付かせていただきありがとうございます。

（福山市）

（2025年2月22日土曜日）

将来に向かって

英語の学習

佐伯 航太
野球部
福山市立日吉台小出身

将来のために英語を勉強

中学生　佐伯　航太　13歳

僕は将来、通訳になりたいと思っています。そのために、毎日英語の勉強を欠かさず頑張っています。

英語の授業で先生が、「英語はどんな分野でも役に立つ」「自分たちの味方をしてくれる」とおっしゃっていました。僕は英語の授業が好きで、得意な教科です。でも、それは将来のためというよりは、テストの点数や成績のためだと思っていました。

先生の話を聞いてから、英語を勉強する目的が変わったように思います。将来何をすることになっても英語は必要だから、勉強をしておいて損はないと考えるようになりました。モチベーションも上がり、今までよりも楽しく勉強できるようになりました。

自分の夢に近づけるように、今の目標は3年生になるまでに、英検2級に合格することです。そのために、毎日の授業でのリスニングやスピーキングにこつこつ取り組んでいきたいです。

（福山市）

（2025年3月29日土曜日）

学校行事

有本 梓紗
英語研究部
福山市立御幸小出身

小学校の恩師の応援 糧に

中学生　有本　梓紗　13歳

感謝祭という学校行事がありました。1年生は恩師の先生へ感謝の気持ちを伝えるため、恩師謝恩会を開催しました。私が招待したのは、小学1年生の時の担任でした。6年前の出来事や、私の様子などを覚えてくださっていて、感謝の気持ちでいっぱいでした。

恩師謝恩会は先生を迎えるところから始まりますが、卒業式以来会っていなかったので少し照れくさかったです。合唱を披露した後、先生方との歓談がありました。中学校生活で特に力を入れていることや、楽しかったことなど、たくさん話しました。

感謝祭の1週間後、妹を通して先生から手紙とお守りを頂きました。手紙には、「これからの学校生活もがんばってね」「招待してくれてありがとう」と書かれていました。

毎日、一生懸命勉強に取り組んでいますが、たまに気を抜いてしまうこともあります。ずっと見てきてくださった恩師の先生に成長した姿を見せられるように努力を続けていきます。

（福山市）

（2025年2月13日木曜日）

将来の夢

信近 瑠唯
バレーボール部
福山市立竹尋小出身

義肢装具士になるために

中学生　信近　瑠唯　13歳

私は将来、義肢装具士になりたいです。病気やけがなどで手足を失った人が、元のように外を歩き、楽しい生活を送ることができるように支える仕事に興味を持ったからです。

保育園に通っている時、同級生に義足を着けている子がいました。その子はとてもポジティブで、物心がつく前に手術をして足を失ったにもかかわらず、それを受け入れて、いつも明るく楽しそうに過ごしていました。

そんな姿を見て、この子のように手足を失った人が、周りと同じような生活が送れるように支えたいと思いました。義肢装具士になるには、コミュニケーション能力も必要です。患者さんから必要な情報を聞き、それに合わせて型を作っていくからです。だから、幅広い年代の人たちと、意見を交換できる能力は大切だと思います。

そのために、中学生の今からたくさんの人とコミュニケーションを取り、力を付けていきたいです。

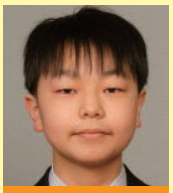
（福山市）

（2025年4月9日水曜日）

ヤングスポットに挑戦！

13歳　1・2年生は日常生活や自分の夢を文章化し、中國新聞「ヤングスポット」への投稿に挑戦しています。　14歳

クラブ活動



読書部

青木 理矩
福山市立水呑小出身

多くの人に本の楽しさを

中学生　青木　理矩　13歳

僕は中学校で読書部に入っています。日々活動を楽しんでいます。

学校の感謝祭で、読書部は「Eほん大図鑑」というテーマで展示発表をしました。僕はお客さんに絵本の魅力や豆知識を紹介したり、読み聞かせをしたりしました。

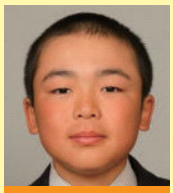
人に絵本について伝えることは、思っていた以上に大変でした。特に、読み聞かせでは、子どもたちの視線に合わせることや、役によって声を変えることにとても苦労しました。

また、お客さんを呼び込む係も難しかったです。「こんにちは」「読書部の展示を見に来ませんか」などのかけ声を大きな声ですることは、初めての体験でした。

今回の体験で、本を通して人とコミュニケーションを取る楽しさを感じることができました。人とのつながりを、これからもっとたくさん体験し、本の楽しさを多くの人に伝えたいです。

（福山市）

（2025年1月28日火曜日）



野球部

佐藤 智哉
福山市立湯田小出身

憧れの兄 いつか超えたい

中学生　佐藤　智哉　13歳

僕には兄と弟がいます。兄弟3人とも小さい頃から野球をやっています。2歳年上の兄とは中学校の部活でプレーし、弟は地元の小学校のチームでプレーしています。

兄は僕の憧れです。ピッチャーで試合にいつも出て活躍していました。僕は中学校に入学して、兄と同じ部で毎日練習してきました。兄の野球に対する姿勢からいつも刺激をもらっています。

その兄が昨夏で中学校野球を終え、今、僕は兄のいない新チームで活動しています。自分で毎日500スイングすることを決めています。

最初は大変でしたが、努力した分、結果が出ることは、兄の姿勢を見てきたので分かります。そして、最近では試合でも必ず1本はヒットを打てるようになりました。

野球は日々の積み重ねが大切です。目標は、兄のような強い選手になることです。そのために毎日努力して、いつかは兄を超える存在になりたいです。

（福山市）

（2025年3月13日木曜日）

ヒューマンライツ

髙橋 冴果
福山市立道上小出身

核廃絶を願って署名活動

中学生　髙橋　冴果　13歳

私は平和や人権について考えるヒューマンライツ部で活動しています。

いろいろな活動の中で一番印象に残っている活動は「核廃絶！　ヒロシマ中高生による署名キャンペーン！」です。世界から核をなくすための活動です。核の恐ろしさを知っている国だからこそ、他の国が同じような思いをしないように核廃絶を訴えています。

そして、核廃絶を願う人たちの思いを集める署名活動をしています。署名してくださる人もいれば、批判的な言葉を投げかけてくる人もいます。私はいつもこう思います。「なぜ努力していることを否定するのだろう」。どんなにひどい言葉を投げかけられても私は決して諦めません。

私はこの活動を始めたばかりですが、何年も活動を続けてきた先輩方、被爆者の方々の思いが伝わってきました。そして、たくさんの人に平和について考え、本当の平和とは何かを知ってもらいたいと思います。

（福山市）

（2025年2月22日日曜日）

バレーボール部

山本 大智
福山市立神辺小出身

声出しの大切さ意識する

中学生　山本　大智　13歳

僕は中学校でバレーボール部に入っています。大会では多くのチームが試合の始まる前や試合中に声出しをします。

声出しをする目的は気合を入れ、チームを盛り上げるためです。声出しがよくできているチームには迫力があり、強さを感じます。

バレーはチームスポーツです。コート内で仲間と話すときや、確認するときにはよく声を出し合います。かけ声がないと2人の間にボールが来たとき、どちらが取るのか分からないとか、セッターがトスをどこに上げればいいか迷うなど、困ることが多くあります。だから、バレーでは声出しが大切なのです。

声出しは日常生活でも大切です。人と会話するときや、人を呼ぶとき、授業などでも声を出します。

ただ、声を出すことで人を傷つけてしまうこともあるため、どう声を出すかが大事です。これからの中学校生活で声出しを意識して生活し、バレーでも強くなりたいです。

（福山市）

（2025年3月2日日曜日）

15歳 修了論文 ～書くことは考えること～

盈進のすべての教員で、執筆をサポートします

読書科の授業では「自己」⇒「社会」⇒「世界」と視野を広げていき、中学修了時には再び「自己」へと回帰するサイクルの読書活動を通じて「未来を見つめる15歳」の育成を目指しています。中学3年生では、興味・関心に基づいたテーマを自ら設定し、4000字以上の本格的な論文に挑戦。専門的な本を読み、自ら調べ、担当の先生の指導を受けながら半年以上かけて論文を書き上げます。主体的な学びを通して思考力を鍛えることで「21世紀型能力」の礎を築くとともに、自分のやりたいこと、なりたい姿を思い描くことができます。

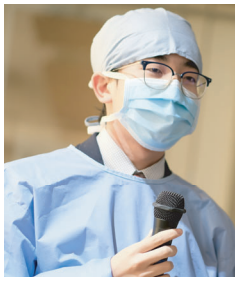
2024年度修了論文テーマ例

- 本と電子書籍
- サッカーと人種差別
- ダンスとコミュニケーション
- 知育菓子の可能性
- Bリーグの経済効果
- 花粉症撲滅大作戦
- 演劇教育の効果
- フードロス削減
- やる気スイッチの入れ方
- ChatGPTとの共存
- 利き手の決定要素
- ルービックキューブと学力
- 薬学的な温泉効果
- 地震と建築技術
- カカオポリフェノールと健康
- 結婚式の実態
- 薬と副作用
- 進化する航空機技術
- 宇宙ゴミ問題と宇宙開発の未来
- ローカル線活性化への挑戦

修了論文は手書きとタブレットのハイブリット式
左：盈進オリジナル「修了論文テキスト」

フィールドワーク

この修了論文では、夏休み中に自分で計画したフィールドワークをおこなうことになっています。自らのテーマについてより高度な知識を持つ専門家や文化的・技術的な関連性の見られる企業などを訪問したり、手紙やメール等でやりとりをしたり、指導教員と共に計画的した実験を試みたり…と、その手法はさまざまです。もちろん本はそれを読むことで愉しみをもたらしてくれるものですが、本から一歩飛び出して、現実社会とのつながりが生まれ、そこに「ひと」との出会いが生まれるとより豊かな喜びを生み出してくれるものです。「読書科」の目指す学びの完成形は、今その価値が注目される「探究」的学びそのものだと言えるでしょう。



プレゼンテーション

また修了論文を書き終えた中学3年生は、3学期に中学2年生に向けて全員でプレゼンテーションをおこないます。これから修了論文に取り掛かる後輩の心に火をつける、伝統の行事です。本校ではICT環境の充実により、ZOOMを用いたインタビューやオンラインプレゼンテーションなど、その内容をさらに発展させながら取り組みを継続しています。

盈進図書館

みどりのＥＣＬ

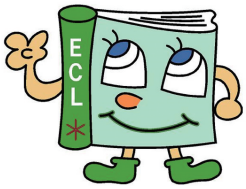
～ Eishin Community Library ～

ICT環境の整備、システムの電子化により充実した研究活動を実施!

地域に愛され　地域と共に
こころを育み　出合いと学びを創出する
知の集積地　知の発信地

2019年度、盈進中学高等学校は新校舎での学びをスタートしました。その「顔」とも言えるエントランスには、従来の約３倍の大きさの新図書館が位置づけられています。新しい本も加わり、「知の集積地・発信地」として、さまざまな場面で盈進生の学力のベースを育む読書活動を支えます。また、新図書館の建築には、伝統の「読書科」の学びを生かした工夫が施されています。生徒には１人１台のタブレットICT環境が整い、中学３年生の修了論文など、この新図書館を中心とした探究活動がさらにパワーアップ!

新図書館には盈進に通う生徒・保護者、そして将来的には地域に開けた出合いの場となるように、「みどりのECL」という親しみやすい愛称がつきました。「いーくる」という呼び名は「Eishin Community Library」の略語であり、「盈進に『来る』」という掛詞にもなっています。あわせて図書館オリジナルのマスコットキャラクター「盈図（えいと）くん」も誕生し、図書館で行われるさまざまなイベントに登場します。愛称・キャラクター名・デザインともにすべて校内の生徒による発案です。これは、「みどりのECL」の主役は生徒１人ひとりであり、生徒たちの手によってこの図書館が作られていくことを意味しています。なお2024年度より、「盈進図書館地域開放」を段階的に試行しています。



Special Report 2023

作曲家 阿部海太郎さん再来校！

『私』にしか聞こえない音を、『だれか』に伝えるために」

1冊の本をきっかけとしてさまざまな出会いが生まれる盈進ドリームプロジェクト。2021年11月22日に感動的なホンモノ講座をおこなってくださった作曲家の阿部海太郎さんが2年後の同日、再び盈進にお越しくださいました。2023年大人気を博したNHK連続テレビ小説『らんまん』の音楽も担当されますますご活躍中の海太郎さん。中学生は海太郎さんが音楽を担当された舞台の原作『モグラが三千あつまって』を全員で読んだり、『らんまん』の放送を視聴したりするなど、今回もたくさんの学びを重ねて、海太郎さんとの再会の日を迎えました。

©高橋マナミ

阿部（あべ） 海太郎（うみたろう） 氏　プロフィール

1978年生。幼い頃よりピアノ、ヴァイオリン、太鼓などの楽器に親しみ、独学で作曲を行うように。東京藝術大学、同大学院、パリ第八大学第三課程にて音楽学を専攻。クラシック音楽の伝統様式に着目しながら今日的な表現を追求する。コンサートの企画やアルバム制作などすぐれた美的感覚と知性から生まれる音楽表現が多方面で評価され、舞台、テレビ番組、映画等、幅広い分野で作曲活動をおこなう。過去の代表作として蜷川幸雄演出のシェイクスピア作品、長塚圭史演出作品、NHK『日曜美術館』、映画『ペンギン・ハイウェイ』など多数。

当日は海太郎さんの素敵なピアノ演奏に始まり、『らんまん』の音楽制作裏話、音や楽器についての音楽談義を聞かせて頂きました。また2年前、盈進音楽部のために吹奏楽ヴァージョンをアレンジしてくださった「夏休み」（映画『ペンギン・ハイウェイ』より）の演奏も恒例化。この曲はこれからも盈進にとって大切なプログラムになっていくことでしょう。

ちょうどNHKテレビ小説『らんまん』の放送クールが終わったばかり。盈進図書館では作品のモデルとなった牧野富太郎博士に関する書籍も数多く並んでいます。「日本植物学の父」と呼ばれ、膨大な標本・観察記録を残した牧野博士にならって、理科では中学生全員で植物図にも挑戦しました。

講座終了後にも…

お楽しみの質問コーナー「教えて！海太郎さん！」も大盛況で、散会後も質問をしたい生徒が列をなすほど。海太郎さんの前でピアノを弾き、アドバイスを頂くことのできた幸運な生徒も見られました。

《生徒の感想から》

音楽部の１度目の演奏の後に海太郎さんが指導され、短時間で音が大きく変わった瞬間びっくりしました。海太郎さんが音楽部の人に伝えるとき、「１人だけ授業に遅れた感じに」というフレーズが聞こえました。その言葉を思い出しながら聞くと、静かな教室に急にドアが開いたような音の動きがイメージされ、私の想像力がふくらみました。海太郎さんの表現力ってすごいなと思いました。吸い込まれるようなお話でした。（１年生）

やっぱり私は音楽が好きだなと今日実感しました。特に好きな「ボタン」の曲を高知の民間オーケストラの皆さんが演奏する動画を見て、なんだか心にグッとくるものがありました。私は将来の夢が脳神経外科医なのですが、オーケストラの団員になる夢もいいなと思いました。新しい視点を海太郎さんにもらいました。（１年生）

小学生の頃、盈進のオープンスクールに来ると流れていた曲、あの曲を海太郎さんが作っていたのだということを最近知ってとても驚きました。海太郎さんがピアノを弾いてくださったとき、私はとても不思議な気持ちになりました。上手く言葉にできないのですが、世界が変わり、深い森の中に入り込んだような気分になったのです。音とは本当に人の心を動かし、感動させるものだと改めて気づかされました。（２年生）

僕達は、２年前にも海太郎さんの講演を聞きましたが、今日は過去にタイムスリップしたかのような懐かしさがありました。「私にしか聞こえない音を伝える」という今回のテーマで、海太郎さんは「音」＝「声」だとおっしゃいました。社会的弱者や少数派の声に耳を傾け、それを正確に伝えることがどれだけ大切なことか。「戦争で～万人死んだ」は「１人の死が～万回あった」ということだという海太郎さんの表現は僕にとって目から鱗でした。無機質な報道の裏には数知れない慟哭があること、今日僕にもそんな「声」が聞こえた気がします。（３年生）

NEWS

阿部海太郎さん 3度目の来校決定！
2025年11月21日（金）乞うご期待！

Special Report 2022

子どもノンフィクション文学賞受賞！

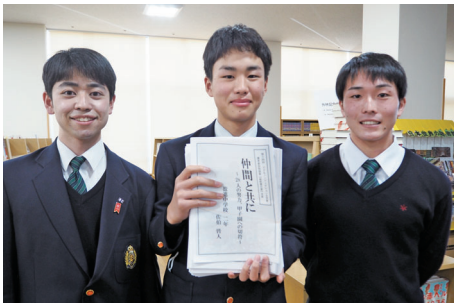
森鷗外や火野葦平、そして松本清張など日本の近代化と共に数多くの文学者を生み出したことで知られる北九州。そうした豊かな文芸土壌を継承すること、また、人々や社会への関心を持つきっかけとなることを目指し創設されたのが北九州市主催「子どもノンフィクション文学賞」です。

第14回目となった2022年度は国内外から小学生の部253編、中学生の部207編の合計460編の応募があり、中学2年生（当時）の佐伯皆人君（福山市立日吉台小学校出身）が選考委員特別賞の最相葉月賞を受賞しました。

第14回子どもノンフィクション文学賞 表彰式　2023年3月18日 北九州市文学館
（選考委員のあさのあつこさん、リリーフランキーさんのお姿も）

受賞作のタイトルは『仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符』。2022年度甲子園出場を果たした野球部の高校3年生全員にインタビューを試み、その強さの秘密を探った原稿用紙50枚の大作です。

（2023年2月27日 卒業直前の先輩たちに受賞を報告）



取材で最もお世話になった朝生弦大キャプテン（右）と内海太陽マネージャー（左）と一緒に。

授賞式での佐伯君のスピーチ

僕の通っている広島県の盈進中学高等学校はこの夏、48年ぶりの甲子園出場を果たしました。コロナ第7波の真っ只中で、学校中が異様な熱気に包まれました。圧倒的存在感を放つ甲子園球場でプレーする先輩方の姿は今も目に焼き付いています。あの日の感動を何かに残さねば、これが僕がこの作品を書いた最大の動機です。

野球部の高校三年生28人全員にインタビュー。中学軟式野球部に所属する僕にとって憧れの存在との延べ1000分を超す夢のような時間でした。取材ノートは高校球児の声でいっぱいです。何を書くか、何を書かないか、50枚の原稿用紙に書ききれない選手たちの思いに触れました。

今僕は、野球という競技がなぜこれほどまでに人を惹きつけるのか、そんな文章を書いています。僕のノンフィクション第2章です。このような素敵な賞を頂けたことが大きな自信になりました。野球部の先輩方、そして選考して下さった最相葉月先生に感謝します。本当にありがとうございました。

（取材は感謝祭を終えて少し落ち着いた10月からスタート。先輩たちには受験の合間を縫って協力して頂きました。）

特別賞をくださった選考委員の最相葉月先生は、1998年『絶対音感』で第4回小学館ノンフィクション大賞を受賞。2007年には『星新一 1001話をつくった人』で第34回大佛次郎賞、第29回講談社ノンフィクション賞、第28回日本SF大賞等を受賞。そのほかにも科学技術と人間の関係や精神医学、教育などをテーマに数多くの作品を刊行する凄腕のノンフィクションライターです。讀賣新聞の大人気連載「人生案内」の辛口回答にも多くのファンがいることでも知られています。会場でお会いした最相先生が「よく取材したね！あっぱれ」と褒めて下さいました。

選考委員の先生は最相葉月先生のほか、『バッテリー』で知られるあさのあつこさんや、『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』の作者で俳優としても活躍されているリリー・フランキーさんがいらっしゃいます。

【最相葉月先生の作品紹介】

佐伯君お気に入りの一冊『東京大学応援部物語』（集英社）にサインをして頂きました！

これらの本は盈進図書館みどりのECLで読むことができます。ぜひ手に取ってみてください。

佐伯君の作品の全文はこちらからご覧頂けます。

最相葉月先生の選考講評（抜粋）

最相賞は「仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符」です。軟式野球部のピッチャーでもある著者が、48年ぶりに夏の甲子園に出場した同校の高校野球部員をエースから補欠、マネージャーまで全員に取材して各人を紹介した作品です。ただの人物紹介ではないのは、その人物ならではのエピソードや第三者評を交えて立体的に描き出していること。この28人のエネルギーと強い精神力があったからこそ甲子園の扉が開いたのだと思わされました。よく取材しましたね。あっぱれです。

第14回子どもノンフィクション文学賞中学生の部 選考委員特別賞最相葉月賞受賞

仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符～

盈進中学校二年 佐伯皆人

九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす（正岡子規）

今年没後一二〇年を迎える明治の俳人正岡子規が大の野球好きだったことはよく知られている。幼名「升（のぼる）」をもじった「野球（のぼーる）」という雅号を用いた子規はアメリカより伝来して間もないその球技に大いに魅了されていたようだ。野球伝来から一五〇年を迎える今年、甲子園球児のヘルメットにはそれを記念するステッカーが貼られていた。今や国民的スポーツとして老若男女から愛される野球。とりわけ高校野球に対する人々の熱量には目を見張るものがある。

二〇二二年八月七日。僕は兵庫県西宮市にある甲子園球場のアルプススタンドにいた。青い空にくっきりと浮かぶ夏雲。黒土と緑のグラウンド。そしてスタンドを埋め尽くすスクールカラーのえんじ色。強烈な色のコントラストが十四歳の僕を圧倒した夏だった。

甲子園、それは言わずと知れた高校野球の聖地である。全国十三万二二五九人の高校球児（日本高等学校野球連盟令和四年統計）がしのぎを削り、全国の高等学校三五四七校（今大会）の頂点目がけて熱戦を繰り広げる。各校の甲子園のベンチ入りは一八人だから、実に0・67％の確率でしか立てない舞台に僕たちの先輩がいる。その夢のような光景は今も僕の脳裏に焼き付いて離れない。

（冒頭文のみ掲載）

EISHIN NEWS

読書部ニュース!

2023年度の図書館研修旅行は
「こども本の森神戸」(兵庫県)

2024感謝祭展示
「Eほん大図鑑」が600人以上の
来場を頂き大成功!

盈進に新設された「読書部」が本格的に始動し3年が経過しました!部員も増員し、自慢の図書館みどりのECLを拠点にステキな活動を展開中!ここで紹介します!

成瀬は天下をとりにいく』を絶賛推し活中!

#盈進読書部インスタ開設!

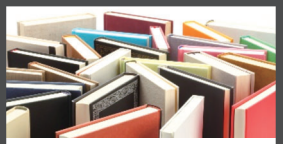
Instagram

@EISHINDOKUSHO55

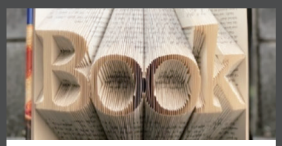
ヨシタケシンスケ展in岡山に行ってきました!

読書部の活動内容

本のあるステキな場所へ行こう



本と関わるステキな人に会おう



本のあるステキな空間を作ろう

TO DO LIST

- 本をめぐる旅
- 読書会をひらく
- イベント企画
- オリジナルグッズ作り
- 本の作者に会いたい
- ブックハントに出かける
- 学校中に本を
- …まだまだいっぱい!

川上徹也著『あの日、小林書店で。』(PHP文庫)という作品に盈進読書科ならびに盈進読書部のことが載っています!ぜひお読み下さい。

WELCOME TO
EISHIN READING CLUB★

中国新聞社主催「みんなの新聞コンクール」新聞切り抜き作品の部　広島県知事賞受賞

4年生（当時）の坂井瑞希さん・足立美咲さん・渡邊日椰君・橘高永輝君の4人は「全ての人へ　絵本の可能性」というテーマで新聞切り抜き&意見感想のまとめをおこない、広島県知事賞を受賞しました。また、中学3年生の藤原美空さん・七川結衣さん・藤井珠生さんの3人も佳作を受賞しました。

全ての人へ 絵本の可能性

福山市・盈進高1年　足立 美咲さん　坂井 瑞希さん　渡辺 日椰さん　橘高 永輝さん

「第10回藤原正彦エッセイコンクール」優秀賞（第2位）受賞

4年生（当時）の足立美咲さんは読書部の活動でつながった書店主との交流から本と書店の未来について考えたエッセイを書き、応募作1339作品の高校生部門で優秀賞を受賞しました。

街の「小場所」が残してくれたもの

盈進高等学校一年　足立 美咲

「五月末でこの店閉店することにしたんよ」

積年の重労働でありえない角度に折れ曲がった腰を手で支えながら、彼女はそう言った。

饒舌な関西弁を気持ちよく聞いていた私たちは突然飛び出した「閉店」という言葉に一瞬耳を疑う。と同時に彼女自身も本当はそれを伝えるつもりがなかったのだろう、思わず口をついてでた「閉店」という二文字の持つ現実味に戸惑いを隠せずにいた。

兵庫県尼崎市にある小林書店は、小規模ながら七十二年続く老舗の書店で、本の配達やビブリオバトルをおこなうなど、いわゆる「街の本屋」として地域から愛されてきた。「コバショ」という愛称は、地域住民の居場所となる「小場所」とも繋がるネーミングだ。店主の小林由美子さんが父親から受け継いだ本屋を震災や不況の波など幾多の困難から守り抜いてきた姿は、『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』という本に描かれ、ドキュメント映画も制作されている。

私は学校で読書部という部活動をおこなっている。そこでは定期的に読書会を開催するのだが二年前初めてこの本を手に取って小林さんの存在を知った。目標もなく出版社に就職した社会人一年目の大森理香が小林さんに出会うことで、仕事への情熱を見つけ出す物語。作中小林さんは本屋という仕事にかける熱い思いを語っているのだが、実在のモデルが存在するノンフィクションノベルだと知った私たちが、読後最初に抱いたのは「この人に会ってみたい！」という正直な感想だった。

私たちはすぐに手紙を書くことにした。本を読んだ経緯や読書会で出た感想、小林さんに会いたいという気持ちを素直に伝えた。これまでも本の作者に手紙を書いた経験はあるが、返事が返って来たことはなかった。今回もきっと一方的に思いを伝えるファンレターと思われるかもしれない。でも私たちは本を読んだ興奮の冷めぬうちに一気に書き上げた。

驚いた。返事がすぐに返ってきたのだ。返事と言っても小林さんが学校に電話をかけてこられて「今手紙を書いて送ったんやけど、学校に行かせてもらおう思うてます。作者の川上さんにもすぐ連絡して、そんな学校あるなら見てみたい、行こ行こってなりまして」

驚いた。何よりも小林さんの行動力に。本の中に登場する小林さんそのままだ。そして本当に小林さんは作者と取次の方を引き連れて学校にやって来たのである。二〇二二年秋、コロナ第七波と第八波の狭間のことだった。

実際に小林さんにお会いしてさらに驚いた。小林さんはもう自立するのも困難なほど腰が曲がっていたのだ。私たちの活動する図書館を案内する際もスーツケースにもたれる小林さん。しかし、座って話し始めるともう止まらない。関西弁炸裂。四十年以上本屋を営む中で「もうあかん」と思ったこと、奇跡のような体験、本への愛情などを日が暮れるまでたっぷり話された贅沢な時間だった。

コロナ禍がようやく沈静化した二〇二四年三月末、私たち読書部は念願の小林書店訪問という機会を得た。新幹線で神戸まで行き、尼崎まで電車で三十分。立花駅から商店街を抜けた先にあの青い屋根がある。十五名入ればもうお店は満員状態。初めて来たのになぜか懐かしいコバショで小林さんのあの関西弁が聞ける。よどみない話をうっとりと聞いていた私たち。だがしかしその瞬間は訪れた。

「五月末でこの店閉店することにしたんよ」

小林さんの歩き方を見ればその理由は一目瞭然ではある。でも…でも…私たちは複雑な気持ちだった。体が辛くて本の配達を泣く泣く辞めた時、ボランティアでやって配達をしてくれる人が次から次へと現れたこと。店のシャッターを毎朝上げてくれる人がいること、コバショには奇跡が起き続けていたが、七十五歳の小林さんの決断は固いものだった。私たちは最後のコバショ訪問に間に合ったのだ。

街の小さな本屋がまた一つ姿を消す。それは本当に寂しいことだ。その多くは紙や配達費の高騰、電子本への移行、読者の減少など「本が売れない」ことによるものだが、実際に全国の書店はこの十年間で三分の二程度に減少している。「書店ゼロ」の地域が全国の自治体の四分の一を占める現状を受け、先日経済産業省による「書店復興プロジェクト」が打ち出されたという。本に囲まれる感覚や、未知の本との出会いなど書店にしかない魅力をなくしてしまわぬように書店をサポートする方法を模索するようだ。

私は本が大好きだ。小林書店のような個性豊かな書店や図書館を訪れて、本のある空間の大切さも肌で感じてきた。インターネットで情報も娯楽も簡単に手に入る今、本の世界に浸ることの意味を改めて考えていきたい。

私は小林さんのこの言葉を胸に刻む。

「紙の本はなくならない。あなた達を見てるとそう確信するよ」――小林さんから受け継いだ本の文化を、今度は私たちが守る番だ。

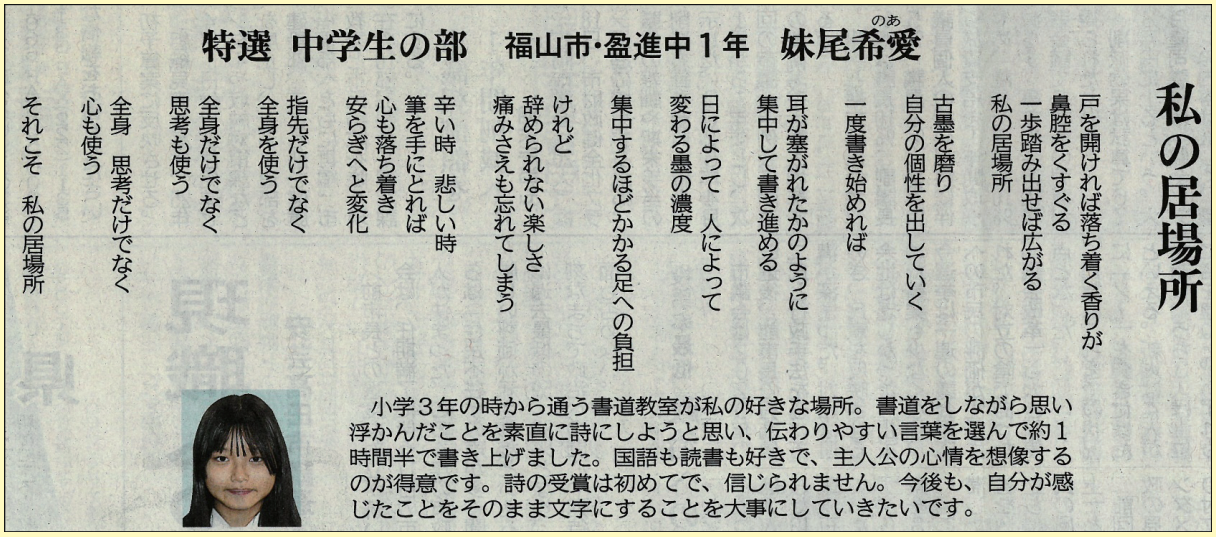
生徒の活躍 ～表現力を磨く～

盈進中学校の読書科で培った「読む力」「書く力」を発揮し、生徒たちはいろんな「伝え方」で自己表現をします。ここでは2024年度に生徒が挑戦した作品の一部をご紹介します！

第23回 木下夕爾賞

ふくやま文学館と中国新聞備後本社が主催し、福山市が生んだ詩人「木下夕爾」を顕彰するためにもうけられた木下夕爾賞は、小中学生を対象に詩作を募集し23年目を迎える歴史あるコンテストです。

今年度は2752点の応募があり、中学生の部961作品の中から中学1年生の妹尾希愛さん（福山市立蔵王小学校出身）が特選（第1位）を受賞しました。盈進中学校からは4年連続の特選受賞です。



特選 中学生の部　福山市・盈進中1年　妹尾希愛（のあ）

私の居場所

戸を開ければ落ち着く香りが
鼻腔をくすぐる
一歩踏み出せば広がる
私の居場所

古墨を磨り
自分の個性を出していく
一度書き始めれば
耳が塞がれたかのように
集中して書き進める

日によって　人によって
変わる墨の濃度
集中するほどかかる足への負担
けれど
辞められない楽しさ
痛みさえも忘れてしまう

辛い時　悲しい時
筆を手にとれば
心も落ち着き
安らぎへと変化

指先だけでなく
全身を使う
全身だけでなく
思考も使う
全身　思考だけでなく
心も使う

それこそ　私の居場所

小学3年の時から通う書道教室が私の好きな場所。書道をしながら思い浮かんだことを素直に詩にしようと思い、伝わりやすい言葉を選んで約1時間半で書き上げました。国語も読書も好きで、主人公の心情を想像するのが得意です。詩の受賞は初めてで、信じられません。今後も、自分が感じたことをそのまま文字にすることを大事にしていきたいです。

伊藤園おーいお茶 第35回新俳句大賞

盈進中学高等学校では毎年冬休みの課題として伊藤園の新俳句大賞に挑戦しています。これは過去の応募総数4500万句を超える、日本最大級の俳句コンテスト。第35回は応募総数188万9582句の中から、中学生は6名の生徒が入賞を果たしました。なお都道府県賞と佳作特別賞の2作品は商品パッケージに掲載されています。盈進冬の風物詩とも言える取り組みです。（学年は応募当時）

【都道府県賞】※パッケージ掲載
眠たげな犬のまばたき除夜の鐘
3年 安井美結（福山市立湯田小学校出身）

【佳作】
六角形の校章今朝の雪結晶
3年 髙橋賢一（福山市立桜丘小学校出身）

【佳作特別賞】※パッケージ掲載
はっさくが山じゅう広がるいいにおい
1年 村上朝陽（福山市立中条小学校出身）

【佳作】
タンバリンのリズム奏でて餅をつく
3年 佐藤愛華（福山市立戸手小学校出身）

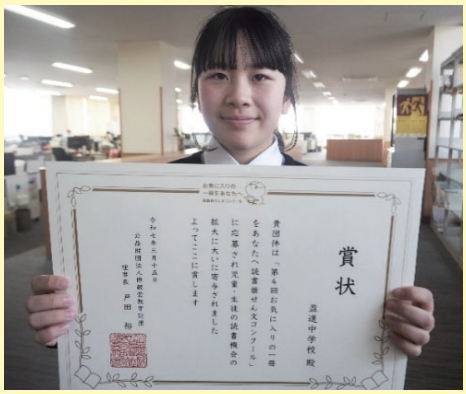
【佳作】
一船の海を断ち切る夏の空
2年 大道瑛太（福山市立神辺小学校出身）

【佳作】
かざし見るハッカの飴玉秋の月
3年 高橋実優（福山市立御幸小学校出身）

第4回 お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール

公益財団法人博報堂教育財団主催による第4回「お気に入りの一冊をあなたへ　読書推せん文コンクール」において、読書推薦作文に中学校1～3年生全員で取り組んだ結果、3年連続の団体賞を頂きました。

このコンクールは子どもたちの読書機会の拡大を目的、2020年から開催されたもので、第4回となる今大会には524団体の応募があり、うち団体賞は全国で53団体が受賞しています。



盈進中学校 第5回校内読書感想文コンクール

盈進中学校では、2020年度より校内読書感想文コンクールを実施しています。これは、朝読書や読書の授業などで読んだ本についての自分の思いや考えを文章化するもので、校長賞をはじめ、各クラス担任賞さらにはクラブ顧問賞まで用意してある盈進のビッグイベントになっています。

2024年度は武本梨瑚さん（矢掛町立矢掛小学校出身）の作品「死は終わりではない」（大谷美和子『りんごの木を植えて』の感想文）が、校長賞ならびに1年D組担任賞をダブル受賞し、中国新聞の「青春文学館」にも掲載されました。

青春文学館

りんごの木を植えて　大谷美和子作、白石ゆか絵（ポプラ社）

武本 梨瑚（盈進中2年）

生きる希望持つこと 大切

私の祖父は昨年4月に亡くなった。いつ亡くなってもおかしくない状態で、心構えはできていたがとても悲しかった。しかし、身近な人と過ごした大切な日々は、私たちの「今」につながっている。この本の主人公みずほも大好きなおじいちゃんを亡くした。おじいちゃんがみずほに教えてくれた言葉がある。「たとえあした、世界が滅亡しようともきょうわたしはりんごの木を植える」というルターの言葉だ。りんごが実るのを見ることはできなくても、新しい意志だった。だからみずほが月に1回おじいちゃん、おばあちゃんと会食する「いっしょごはん」の時間こそ、家族の幸せの形だったと言える。

私はこの本を読んで「死は終わりではない」というメッセージを受け取るとともに、私にとってのりんご、生きる希望を持つことの大切さをかみしめている。大好きな家族と過ごす時間、大好きな学校で大好きな仲間と過ごす時間。祖父がくれたたくさんの思い出を胸に、私は前に進んでいきたい。

選択は、命よりも家族とのかけがえのない時間を選んだおじいちゃんの強い意志だった。だからみずほが月に1回おじいちゃん、おばあちゃんと会食する「いっしょごはん」の時間こそ、家族の幸せの形だったと言える。

私はこの本を読んで「死は終わりではない」というメッセージを受け取るとともに、私にとってのりんご、生きる希望を持つことの大切さをかみしめている。大好きな家族と過ごす時間、大好きな学校で大好きな仲間と過ごす時間。祖父がくれたたくさんの思い出を胸に、私は前に進んでいきたい。

中国新聞 青春文学館
2025年5月11日 朝刊掲載

多目的ホールに全作品を掲示します

私の盈進読書科 ～卒業生の声①～

中学高校の６年間で出合った１冊の本が、未来を大きく変えるかもしれません。パイオニア１期生として入学した民宅君は、毎日尾道から電車通学し学業と剣道部との両立を果たした生徒です。彼が盈進の図書館で最初に手に取ったのは『風の谷のナウシカ』。この本との出合いが、文学の扉を開く大きなきっかけになったようです。

《2023年度高校3年生／パイオニアコース／剣道部主将》

民宅 航平 （尾道市立栗原小学校出身）

北海道大学 文学部へ進学

❖北海道大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

大好きな近現代の文学を研究したいです。北海道大学は最初の１年目は教養科目・基礎科目を幅広く学ぶ「総合教育部」に配属され、学びのシステムが非常にしっかりしています。それから、やっぱり日本屈指の広大な敷地は魅力的ですね。日本全国から集まったいろんな価値観を持った人と出会い、大いに刺激を受けて、自分の視野を広げたいと思っています。

❖文学好き、ということは小学生の頃から本が好きだったの？

まったく。正直言って小学生の頃はほとんど本を読んだことがなかったです。剣道一筋だったので、小学校から帰ると稽古漬けの毎日でした。本よりもプラモデルやレゴブロックの方に興味を示していた子ども時代です。でも、母がいつも本を読んでいて、それをノートに記録しているような人で…母は僕が知っている人の中で、最強の人間だと思っているんですが、家では読んだ本の話をよくしてくれましたね。

❖中学生になって本を読むように？

はい。盈進に進学を決めた理由の１つに「読書」という授業があったのは確かです。朝読だけじゃなく、授業でも本を読むくらいですから、自然と本を手に取るようになっていきました。その中でも衝撃を受けた１冊が、『風の谷のナウシカ』。あっ、これです。まさにこの上下巻。もうだいぶボロボロになってますね。まずは本の大きさに驚いて。「こんな大きな本があるんだ～」と思って図書館で借りて、教室で読んでいたんです。そうしたら本当に面白くて。やっぱりナウシカは原作で読むべきです。非日常感というか、もうスケールが違います。核戦争後の世界のメタファーとも読み取れる舞台設定は、資本主義や科学技術への批判と環境問題への警鐘とも捉えることができ…宮崎駿さんすごすぎます。

❖『ナウシカ』を朝読で読みふけっている姿がとても印象的でした。本が大きすぎて民宅君の姿が見えなくなっちゃってました。

そうですね（笑）。小学生の頃には読んでこなかった本の世界に一瞬で魅了されるほどこの１冊との出会いは大きかったです。加えて本好きなクラスメイトの存在もあったように思います。ライトノベル好きな仲間がいて、影響されましたね。好きなジャンルの本の情報交換をしたりして…クラスメイトには、自分で文章を書く仲間も出てきたくらいでした。仲間の力は大きいです、やっぱり。

６年間一緒に過ごした仲間

❖でも中学生の生活も部活動があって忙しかったのでは？

はい。でも本を読みたい気持ちがどんどん高まってきて、部活の休憩時間にも汗を滴らせながら本を読んでいたりするほどでした。そんなある時、読書の授業の中で感想文を書く機会があってたまたま手に取ったのが上橋菜穂子さんの『精霊の守り人』だったんです。これは僕に強烈なインパクトを与えた本でした。ライトノベルも楽しかったんですが、だんだん物足りなくなっていた頃でした。この本には確かな背景知識に基づく文章の強さがあったんです。圧倒的にこの世界じゃない感が出ていてしかも文章が完璧に美しい。シリーズがたくさんあるんですが、熱中してどんどん読んでいきました。そのあとに出た『獣の奏者』も含めてどれも素晴らしい作品です。尾道までの電車の行き帰りにもずっと読んでいましたね。すごく分厚くて重たいんですが、荷物が増えても読みたい気持ちの方が強かったです。

剣道部の先輩たちに囲まれて

❖高校生になっても、本を読む時間はあったの？

いいえ。大変でした。クラブの休みが月１回くらいで、高校３年生の８月までやっていましたから、勉強する時間の確保の方が先でした。でもそうなると国語の授業で読んだ作品や、入試問題で解いた作品などに面白さを感じる機会が増えてきました。教科書作品では特に森鷗外の『舞姫』が心に残っています。僕は文学作品の「つくり」に興味があって、きれいな文がどうしてきれいなのか、「読め」ば「読む」ほどそれを「書く」という所為にも関心が湧きました。伏線などの技法についても奥深さを感じてしまいます。

５年生 猛勉強中！

❖民宅君にとって本とは？

本はまず、知らないことを教えてくれます。自分と違う価値観にも出会える。それから僕は本の世界には限界がないと思っています。だって今住んでいる世界とは全く違う世界にだって行けるんですよ。いろんな人の話を聞いてみたいけれど、僕たちはそれが叶わないことも多い。そんなとき、本ならいろんな人との出合いが期待できるんです。そんな風に考えると、「図書館」っていうのは本当に素晴らしい制度だと思います。自分だけでは手に入れることができない本がどこの町にだってある。「図書館」も無限の空間です。もっと活用されるべきですよね。僕は本に関わる仕事、たとえば編集者になりたいと考えていた時期もありますが、人と本とをつなぐそんな仕事もいいかもしれないと今は考えたりもしています。

❖では中高６年間を振り返って、中学生のみんなにメッセージを。

僕は小学生まで漫画以外の本をほとんど読んだことがありませんでしたが、中学生の時に読んだ本がきっかけで本の虜になりました。ボリュームのある入試問題への対応力も身につきますし、そもそもことばを身につけることには他者とコミュニケーションを円滑にできるという本質的な意義もあります。本を好きになるきっかけは何でもいいと思います。とにかく楽しそうな本を手に取ってみることが第一歩です。１冊の本が自分の未来を切り拓くかもしれません。６年間の盈進生活の中で、そんな１冊に出会えるといいですね。

北大受験当日の朝

私の盈進読書科 ～卒業生の声②～

盈進読書科は2007年から中学３年次の修了論文をスタートさせ、探究学習の先駆けとなる取り組みをおこなっています。こうした探究活動の中で2019年度修了論文において優秀賞を受賞した武田柊哉君は、高校生になってもその取り組みを継続し、自らの学びの道を切り拓いた生徒です。高校卒業時のインタビューをここで紹介します。

《2022年度高校3年生／音楽部》

武田 柊哉（福山市立御野小学校出身）

岡山大学 理学部 生物学科へ進学

❖岡山大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

僕は中学３年生で出合った「コケ」の世界に魅了され、大学で本格的に研究を進めたいと考えています。現時点では「進化生態学」という分野に１番興味があるのですが、入学後はまずしっかりと生物学の基礎知識を学び、研究技法や論文を書くための英語力を身に付けたいと思います。

中学1年生入学式

❖そもそも中学3年生でどうして「コケ」の世界に出合ったの？

当時の担任の先生が「コケ」好きな理科の先生だったんです。中学２年まで環境科学研究部に所属していた僕は、もちろん生き物には興味があった方だと思いますが、正直コケには全く興味がありませんでした。でも先生に誘われてコケ探しのために学校周辺を歩いたとき、そこで初めて地面に生えているコケをルーペで見たんです。コケの種類の多さやその美しさに衝撃を受け、そこから一気にハマりました。

仲間と一緒にコケを観察

❖修了論文も「コケ」がテーマだったよね。

はい。僕がコケについて興味を持った時期がちょうど修了論文に取り組む時期と重なっていて。そこから生態や文化的な面を調べれば調べるほど新しいことを知ることができてどんどんのめり込んでいく自分がいました。自分にとって初めて熱中できるものが見つかったと思えました。

❖武田君が中学3年生だった2019年度からフィールドワークの実施が加わったよね？

世界で唯一コケを専門に研究している服部植物研究所（宮崎県）の片桐所長とメールのやりとりをさせて頂きました。また、秋には「キャリア教育in京都」という中3の学年行事があったので、そこで京都大学の杉山教授のお話を聞かせて頂き、個人的に連絡を取ることもできました。それから、倉敷で古書店「蟲文庫」を営んでおられる田中美穂さんという方との出合いも大きかったです。田中さんは、コケやカメや星座について探究され、書籍も出版されている方です。田中さんの書かれた『苔とあるく』（WAVE出版）と『ときめくコケ図鑑』（山と渓谷社）の2冊は、僕をコケの世界に導いてくれた大切な本でもあります。

❖修了論文の最後が「研究者でなくてもちょっと研究してみたいという気持ちに繋がった」という結びだけれど、本当に研究者を目指すことになるとはね！

実は6年生の最初までずっと「薬学部」志望にしていたんです。薬剤師になりたいとか、薬学を学びたいとかという気持ちよりも、とりあえず高い目標を持つために掲げていました。でも、いざ本格的に志望校を絞っていく段階になって、「本当に自分がやりたいと思っていることって何だろう」と思い至りました。好きなものを選ぶ僕を家族も応援してくれました。

修了論文プレゼン大会にて

❖武田君をそこまで魅了するコケってどんな生き物なんだろう。

コケは陸上に最初に上がったとされている生物なんです。それこそ4億年も5億年も前です。体のつくりは至ってシンプルで原始的。普通の生物だったら未発達の体ではどんどん他の生物に侵食されて負けてしまうだろうけれど、コケは違います。自分たちの生きる場所を確保してきた逞しさを持っている。たとえば、普通の生物って人間もそうですけど「保水」が大事ですよね。でもコケはたとえ水がない環境でもそれに適応して生きていくんです。

❖コケを研究することで、どんな未来が思い描けるの？

コケってまだまだ分かっていないことの多い生物なんです。でも最近の研究で二酸化炭素を多く吸収することができるということが分かってきています。これは高校生になって授業で取り組んだ「探究」の活動の中で知りました。僕の修了論文には続きがあったんです。「蟲文庫」の田中さんの所にも通い、たくさんのヒントを頂きましたし、京大フィールド研の伊勢准教授とも連絡をとって学ばせて頂きました。僕はコケの生態を環境問題からアプローチする手法で調べたんです。土がなくても生きることのできるコケを壁や屋根に植えれば冷暖房削減にもつながるかもしれないということも分かっています。今後研究が進めば人類を苦しめる病気にだって対応できるかもしれない…コケの持つ力は未知数ですし、だからこそ研究の価値が期待されています。

❖コケが未来を変えるかもしれないね。
では中高6年間を振り返って、中学生のみんなにメッセージを。

1つ言えることは、どこに自分の未来を変える「きっかけ」があるか分からないということです。僕自身が「コケ」というテーマに出合ったのもそうです。色んなことに興味を持って、まずは自分の足でそこに行ってみて、実際に触れてみる。ちょうど僕が中学3年生だった年からコロナ禍が始まり、学校生活もクラブ活動も学校の行事も全てに制限がかかっていったんですが、それももうすぐ落ち着くのではないかと言われています。だから皆さんもじっとしていないで、自分の足で自由に動いてみてください。その中でピンときたものを調べ、深めていく。それから、僕は人との出合いにも恵まれていたと思います。修了論文の取り組みもそうですし、自分の進路を切り拓くという時にも、これから社会で生きていく時にも、誰と出合うか、その人とどう関わるかは本当に大事なことだと思っています。

これから僕は世界中にある色んなコケを自分の目で見てみたいと思います。本でしか見たことのなかった世界です。本と出合い、人と出合う修了論文は皆さんにとっても大きなチャンスになるはずです。

私の盈進読書科 ～卒業生の声③～

《2021年度高校3年生／ヒューマンライツ部》

酒見 知花（福山市立湯田小学校出身）

明治大学 文学部
（心理社会学科臨床心理学専攻）へ進学

［私をつくった10冊］

1冊の本に人生をまるごと変えてしまう力がある――偉人たちの残したことばの中には本の持つ力について言及したものが少なくありません。盈進の読書科はそうした本の持つ力を信じ、本と出合うチャンス、本が大好きになる仕掛けをたくさん用意しています。瑞々しい感性に満ちた10代で出合った本たちは、きっと人生においてかけがえのない宝物になることでしょう。盈進の読書科で学んだ「読むこと」「書くこと」を通してどのように未来を切り拓いたのか、卒業生の酒見知花さんが「私をつくった10冊」を紹介します。

❶きっかけの1冊『キュリー夫人』

小学3年生の時、学校の廊下にあった本棚に伝記が数冊あり、なんとなく手に取った本でした。キュリー夫人の幼少期から亡くなるまでの人生、そして夫人亡きあとの状況まで細かく書かれていることに驚きました。彼女の偉業だけに焦点が当てられていないからこそ、人間らしさを感じて面白くって。分厚い本であったのにも関わらず、授業が始まったことにも気づかないくらい夢中で読んでいる自分がいました。それからは、ヘレンケラーやナイチンゲールなど、本棚にあった伝記を片っ端から読破し、さらに本を求めて図書室に通うように。図書室の目立つ場所に漫画で描かれた伝記はいっぱいあったのですが、図書室の一番奥、埃が舞っていそうなところにある活字だらけの伝記を「全部私が読む！」なんて意気込み、名前も知らない人の伝記まで読むことも…『キュリー夫人』は本を読み終えることの達成感と「ひと」への好奇心をかき立ててくれた思い出深い1冊です。

❷読書の授業で再読し新たな発見をした『100万回生きたねこ』

保育園の時から祖母に紙芝居や絵本をよく読んでもらっていて、この本も5歳の時に1度読んだことがありました。当時は「この猫、なんども生き返って羨ましいな」なんて思ってはいたものの、はっきりとしたハッピーエンドで終わらなかったことが記憶の片隅に残っていました。中学生になって授業で絵本を読むことにも驚きましたが、読み直しのつもりで読んだ『100万回生きたねこ』は、「あれ、こんな物語だったけ？」と思うほど全く違う物語でした。100万回生きることよりも愛する人との1回きりの人生がこの猫にとっての「幸せ」のかたちなのかな、と感じたとき、どんなプリンセスが出てくる物語よりもロマンチックに思えて仕方なかったのです。年を重ねるごとに絵本の奥深さ、面白さが変化していくこの本は大人からも子どもからも愛される稀有な本であることは間違いありません。

❸集団読書本ナンバー1『卵の緒』

さっぱりとして大胆な母親と、年齢よりも少し大人びている主人公の軽快なやりとりで繰り広げられる物語に、先生の声が聞こえなくなるくらい夢中になって読みふけっていました。「再婚」「血の繋がらない親子」「不登校」というマイナスイメージを持つ言葉ですら日常の一コマに自然に溶け込んでいて、斬新で不思議な本です。私自身の家族とも重ねてみたりしながら、本の中に出てくる母親の「大好きよ」という言葉と親子の関係性、主人公の考え方にどこか救われた気がしました。心がほかほかする気持ちになった初めての本でもあり、今でも度々読み返したいほど大好きな作品です。

❹500ページを超す長編小説『赤ヘル1975』

自分だったら選ばない本を読む機会を与えてくれるところも、読書の授業のいいところ。私は中学生まで読書は好きでしたが、エッセイやノンフィクションなどの類は読まず嫌いをしていました。だからこの本はちょっと苦手なジャンルでした。とっても分厚いので、最初にみんなで少し読んでからある程度ページが進むと自分で読み、1章読むごとにシールが貼られるシステムで読みました。しかし、ここに私の負けず嫌いが発動！誰よりも早く最後まで読むぞと意気込んで読み進めました。すると苦手だったジャンルの本に、私の方からはまって読んでいたのです。もともとカープにも野球にもそんなに興味がなかった私が、いつの間にか「鈴木！もっと打て～！」と読み終える頃には一緒に応援していました。本がきっかけで広島という故郷を見つめ、新たな世界に出会えた気がします。

❺重松作品と言えば『十字架』も

『赤ヘル1975』の作者である重松清さんの作品をもう1冊。この作品はいじめの傍観者が主人公の本で、当時中学生だった私には言葉も内容も重くて重くて、何度もやめようと思いました。しかし、私の心のどこかで「最後まで読まなければならない」って言われている気がして、1か月もかけてやっと読み切った作品です。簡単に人にオススメすることができないけれど、心から「読んでよかった」と思える作品です。小学6年生のときにドラマを見て、スクールカウンセラーになりたいと思っていた私ですが、対話を通して人が人を治療できる心理学に興味を持ち始めていた時期とも重なります。

❻考えるきっかけをくれた『何者』

中学2年生で読んだこの本は考えるきっかけをくれた本です。身近なSNSと就活がテーマの本なのですが、Twitterのツイートを軸に臨場感のある物語が展開され、人間関係の複雑な絡みのようなものが浮き彫りになってきます。この作品を読んで、いっそう家族や友人との直接的なつながりを大切にし、SNSとの付き合い方を考えるようにもなりました。

❼ときには息抜き 楽しみの本は七月隆文作品

中学3年生で『君にさよならを言わない』を手にとって以来、七月隆文さんという方の作品が大好きです。だって物語が「僕には、幽霊が視える」という衝撃的な書き出しからスタートするんですよ。ある時、幽霊が見えるようになった主人公が、消化しきれなかった魂の願いを叶えていく短編集で、あまりにも無常な死というものに対して、読んでいる私が悔しくなるほどどっぷり感情移入し、泣いてしまいました。本当に切ないんですが、温かいんです。毎回、七月先生の作品はタイトルに「？」を浮かべながら読むのですが、読み終わって本を閉じ、タイトルを見たとき「ああ、そういうことか」と納得する瞬間がとても好きでした。恋愛ものはあまり読まない私ですが、七月先生の本は、土曜日の昼下がりぐらいから一気に読み直して、涙を流すという日が1年に2・3回あります。

❽座右の書『生きがいについて』

高校1年生で私は、ついに自分にとってかけがえのない1冊と出合います。この本は岡山県にある国立ハンセン病療養所長島愛生園で精神科医をされていた神谷美恵子先生が書いた本です。中高6年間所属したクラブ活動での学びとも重なりますが、実際に神谷先生が読んだ本が置いてある「神谷書庫」を訪れて、彼女の人柄や生き方そのものに強く心を揺さぶられました。この本は社会的弱者である人物が描かれた精神医学書ですが、神谷先生らしい言葉の紡ぎ方や着眼点は、心理学の道に進むことを決めた私にとって今も心の拠り所となる本です。

❾心理学の名著『心の処方箋』

心理学の中でも臨床心理学を学びたいと考え始めた私は、その後この1冊を手にしました。スクールバスで通う道中に読んでいたのですが、1章ごとのテーマが簡潔で、現代人が悩みがちな問題に「そんなに難しく考えるな」と言われている気がして、バスの中で思わずクスッと笑ってしまうほどでした。読み終えると心がスッキリした感じがするので、受験勉強の合間に読んでリフレッシュしていました。

❿本格的な学びに触れた『児童虐待から考える』

高校3年生の時、教室の後ろにある学級文庫の中にあった本です。受験のために手を伸ばした本でしたが、「加害者」とされる人たちの状況や関係性に目を向けると、そうした人たちを救うことのできていない日本社会の問題点が見えてくるその理論に、衝撃を受けました。社会問題の根本的解決のためには多元的に物事を見つめなければならないということに気づかされ、私自身の視野がさらに広がったという実感があります。いじめや虐待、目に見えない貧困問題などの社会的問題に直面したとき、心理を学ぶことで誰かを救えるのではないかと、自分の学びへの思いを新たにした作品です。

●最後に酒見さんからのメッセージです。

私は高校生の後半で社会学系の本を手に取ったのですが、自分で本を探すことに楽しみを感じる一方で、誰かが推してくれる本を読んでみることも必要だと感じています。中学・高校時代はどうしても忙しい日常の中で本や図書館と疎遠になったりもするので、盈進の読書科の授業や、新しい図書館の存在は貴重なものであると改めて思います。実は、大学入学前に2冊の本を読んでそれぞれ2400字のレポートを提出するという課題が出たのですが、1冊は『夜と霧』という課題で、もう1冊は自分で選んでよいというものでした。そこで私はなんと『100万回生きたねこ』を選びました。幸せの定義についてもう一度考えてみたときに、中学1年生のときにこの本を読んだ私とはまた違う私がいたような気がします。明治大学の和泉キャンパスの図書館は非常に規模も大きく有名なので、そこで思いっきりいろんな本に手を伸ばしたいですね。そして自分が出合ったすてきな本は、一生のうちに何度も何度も読み返していきたいと思っています。後輩のみなさん、ジャンルを問わずいろんな本を読んでみてください。10冊の本との出合いが今の私をかたちづくっているように、どこに自分の世界を広げてくれる出合いが待っているか分かりませんから。1つ1つの出合いを大切に、学びも人間性も豊かにしてくれる本との出合いもその1つだと思います。

「あなたが あなたで あること」

The important thing about you is that you are you.
It is true that you were a baby, and you grew and now you are a child,
And you will grow, into a man, or into a woman.
But the important thing about you is that you are you.
(Margaret Wise Brown "The Important Book")

表紙絵：2024年度高校3年生 髙橋実希
裏表紙：盈進中学校読書科／はじまりの1冊
マーガレット・W・ブラウン『たいせつなこと』